



教皇様の敵

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
© 1996 発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

祈りは弱き者(ペトロ)の救済

〈聖ペトロ、聖パウロの祝日に〉



「教会はたえず神に祈り続けていた。」(使徒行録12・5) ヘロデ王の命で牢に入れられ、生命も危ういペトロのために教会はたえず祈り続けていました。

聖ペトロ、聖パウロの荘厳な祝日には、使徒行録のこの箇所が毎年読まれます。エルサレム教会への最初の迫害を語る部分です。神の使いがペトロを迫害者の手から奪回し(使徒12・11参照)、キリストから授かった使命を最後まで果たすために必要な時間を与えます。

殉教者伝によると、その数年後ローマで、皇帝ネロの時、ペトロとパウロの両使徒はそれぞれ最後のあかしを立て、教会の



歴史を通じて消えないしるしを残しました。

教会はペトロのために祈り続けていた……

その祈りは、キリストご自身がペトロのためにされた祈りを反映していました。「シモン、シモン、サタンはあなたたちを麦のようにふるいにかけることができたが、私はあなたのために信仰がなくならぬようにと祈った。」(ルカ22・31、32)

この言葉にはたいへんな重みがあります。たいへん強い力のある祈りです。キリストはその「時」が来たのを知り(ヨハネ13・1)、それをお話しになったのです。それはゲッセマニでの救いの時、受難と十字架上での

の死の時でした。それは信仰への試練の時であり、ペトロの信仰も最大の試練を迎えます。

ペトロは兄弟たちの

信仰を固めねばならない

サタンはペトロがフィリッポのカイザリア地方で告白した信仰(マテオ16・16参照)を打ち崩そうとこころみました。(ルカ22・31参照)世々にわたって教会が拠って立つべき岩の信仰を破壊しようとしたのです。こころみは執拗でした。サタンはペトロの弱みに乗りました。ペトロにとって、生ける神の子という真理を、十字架にかかったヤウエのしもべという現実と結びつけるのは困難だったからです。(マテオ16・22参照)

そこでキリストは「私はあなたのために信仰がなくならぬようにと祈った」と言われたのです。この祈りはペトロ自身の殉教と十字架上での死ではないで

しょうか?



「…信仰がなくならぬように祈った。あなたは心を取り戻し、兄弟たちの心を固めよ。」(ルカ22・32)

全教会がペトロのために祈るのは、彼がこの世の多くの「ヘロデ」たちのため危険にさらされているためばかりではありません。主がキリストの民の信仰を、特別な方法でペトロに結びつけたからなのです。

信じるとは、自分もあずかっている神的な真理を受け入れることです。この真理は「血肉」



教会の基礎となる真理について、ペトロが究極のあかしを立てたその日、キリストの祈りは成就しました。だからその日は、全教会の大いなる感謝の日です。フィリッポのカイザリア地方でキリストが言われた「シモン・バルヨナ、あなたは幸いな人だ」(マテオ16・17)という言葉がこだまする、喜びの日です。

主キリストはペトロのため、「信仰がなくならぬように」に祈り、教会も彼のために祈ります。そしてペトロは「心を取り戻し、兄弟たちの心を固める」のです。キリストの民の信仰はペトロに結び付いています。彼が神的なことを理解することができるよう、全教会は祈り続けます。

よって明かされるものではありません。「天の父」のみが人間に啓示されるのです。(マテオ16・17参照)これは教会が拠って立つ「岩」です。(マテオ16・18参照)だからこそ、まづキリストが、そして教会全体も声を合わせてたえず祈るので

す。「心を取り戻し、兄弟たちの心を固めよ」とキリストはペトロに仰せになりました。教会はその返礼としてたえず祈り続けます。ペトロが人間的なことばかりでなく、神的なことも理解できるように、人間的な見方によつて来世の光が見えなくなることのないように。兄弟たちの「心を固める」ことができるのは、神の力によるのですから。

この称賛に価する忠誠の秘義を確かめるため、使徒パウロに耳を傾けてみましょう。「私が注ぎのいけにえとして注がれ、帆を張って去るべき時は近づいた。…それなのに主はそばにあって私を強めてくださった。それは私によつて宣教が全うされ、全ての異邦人にそれを聞かせるためであった。」(IIテイモテオ4・6、17)(…)

(一九九三・六・二九)

福音は偏見に警告する

私は司教として、司牧訪問のためここに参りました。このならわし(司牧訪問のこと)はトリエント公会議以降、信徒の皆さんの期待に応えるための司教の重大な義務となっています。司牧訪問で、司教は信徒と直接

に親睦を深めます。こうした機会には、神がご自身を羊飼いにたとえられたことを思い出させます。旧約聖書ではエゼキエルの預言を通して「私は自分で群れを心にかけて、世話しよう。失ったものを捜し出し、迷った

ものを連れ帰り、傷ついたものを巻き、弱ったものを強め、よくよく彼らを牧そう」(34・11、16)と仰せになりました。さらに特筆すべきは、新約聖書のイエズスの言葉です。「私は良い牧者である。」(ヨハネ10・11) 後にイエズスは、ペトロにご自分の羊を牧するよう、お命じになりました。

教会に行くことで父なる神を知り、誰もが一つの霊的な家族を構成する兄弟姉妹であること

を認めるようになります。それは主の御言葉と洗礼その他の秘跡による神の子らの家族です。これから私たちは、群れを牧する偉大な羊飼い、私たちの中におられるイエズス・キリストを記念する聖体祭儀にあずかります。聖体は、キリストが私たちの救いのためお捧げになった、無限の価値ある犠牲を再現します。聖体は神に捧げる絶え間ない賛美と感謝です。主の食卓を囲み、主との親密な一致の

間もなくイエズスの聖心の祝日です。この祝日は六月という月全体に、ある特別な霊的意味あいを持たせています。聖心が伝えるメッセージに耳をすませることは、信者にとって重大事です。キリストの御心において、神の愛は全ての人に及ぶからです。

人。人間の中心となるのは、聖書の言う「心」なのです。二〇世紀も終わるころになって啓蒙主義の不信仰の時代も終わろうとしているようです。人々は神への深い郷愁をおぼえ

それは聖霊の座です。神を知るためにはイエズスを知らねばならず、イエズスがしたように神と隣人を愛し、聖心にそって生きなければなりません。

「神は死んだ」と宣言しました。さて、尽きることのない生命の泉はすべての人に希望をあたたけながら、十字架上で亡くなった神の御子の聖心から流れ出しています。十字架にかかったキリストの聖心から、罪を贖われた新しい人類が生まれ出ます。紀元二千年を迎える現代人は、神と自分自身を知るために、キリストの聖心を必要としています。愛の文明を築くためには聖心が必要なのです。

正しい道とは、主なる神がお定めになった道のことです。主ご自身、セム風の表現を借りて仰せになっています。「弟子は先生より上のものではない。だが弟子が完成すれば、自分の先生のようになる。」(ルカ6・40)ここでイエズスはご自身を模範とし、その行動と教えに従うようお勧めになっています。これこそ唯一の安全で賢明な道案内です。道徳規範に関する教えは、主として山上の説教の中に見られます。

イエズスの聖心は語りかける

ているのですが、神がお住まいになる心の聖域へと行く道がわかりません。その聖域こそ、自由と知性が天の御父への愛に出会う場所、すなわち心です。キリストの聖心は神である御父との普通の交わりの場です。

それは、神の無限の愛を思い誤らせるようなヤンセニズ流の厳格主義への反動でした。今では、イエズスの聖心への信心は、一面的な見方にとらわれた人々にも、理論的とは言えなくとも実践的なニヒリズム(虚無主義)に傾きがちな人々にとっても、消えることのない希望のうち調和のとれた真の豊かさをもたらししています。

兄弟姉妹の皆さん。信頼をもってイエズスの聖なる御心を見つめ、そして特にこの六月、何度も繰り返し返してみてください。「イエズスのまことにいと聖なる聖心を信じます」と。(聖ペトロ広場にて、九四・六・八)

本日の聖書朗読には、もう一つ重大な問いかけがあり、僭越

〔再版のご案内〕

「神の朋友」(第二版) ホセマリア・エスクリバー著 精道教育促進協会スタッフ訳 定価一六〇〇円 千三〇〇円

●品切れになっておりましたエスクリパー師の第二説教集が、このほど再版されました。自然徳とキリスト教徳の全貌を示してくれる18の説教を収録。お問い合わせ・お申し込みは当協会まで。

と偽善を厳しく戒めています。「なぜ兄弟の目にあるわらくずを見て、自分の目にある梁に気をとめぬのか。」(ルカ6・41)

他人の欠点や罪にはいとも簡単に気づいても、自分の欠点や罪は見抜けないのです。私たちの目に妨げがないか、梁がつかえていないか、どうすればわかるでしょうか。それは私たちの行いを見れば明らかです。再び

キリストはパンとぶどう酒の外観のもとに一つのいけにえを残された

「まことにあなたたちはこのパンを食べ、この杯を飲むごとに、主の来られるまで、主のご死去を告げるのである。」(1コリント11・26)

今日、ここラテラノ教会(ローマ司教座聖堂)の前に集まった私たちは、特別な仕方です。キリストの死を告げます。聖木曜日(ローマ司教座聖堂)の日に、聖木曜日の典礼を補うものとも言える大祝日を祝うわけですが、これは来週に迫ったイエズスの聖心の祝日が、聖金曜日の典礼の完成であることと同じ関係にあります。

イエズスの言葉に耳を傾けましょう。「木はその実によつてわかる。」(ルカ6・44) 実とは、行動と、そして言葉をも指しています。口にだす言葉からもその人となりがわかります。実際、善良な人は良い実を結び、悪い人は悪い実を結びます。イエズスのこの教えにはシラ(シラ)の書にある知恵の言葉が響いています。「木の育った果樹園

は、その実で良否が分かります。人の言葉はその心持ちを表わす。」(シラ27・6) (…)

現在、私たちが努力を傾けているのは家庭の問題です。家庭は現代の道徳上、教育上、社会上の困難の悪影響をこうむっているからです。

皆さんにぜひともお願いしたいのは、「確固として揺らぐことなく」(1コリント15・28) キ

の、次に当時の大司祭であったカヤファの前での裁判が続くわけですが、このように聖木曜日は恐ろしい受難への道すがら、十字架刑の宣告を受けるまでの何時間かをイエズスと共に過ごします。ポーランドでは昔から

主の晩餐後の聖体の安置所のことを「暗いチャペル」と呼んでいます。民間信仰の中で、主イエズスが木曜日から金曜にかけてお過ごしになった牢獄の記憶と結び付いているからです。それは確かに休息の夜ではなく、身体的にも精神的にも苦痛がいや増していたことでしょう。

聖体を誉め歌おう

キリストの御体と御血の祝日をめぐると、霧困気は、これとはかなり違います。この祝日が始まったのは比較的遅く中世になってからで、教会に

リストの教えに従う新しい家庭を築くこと、皆さんの家庭をキリストの賜である愛、犠牲、喜びに基いたものとする事です。夫婦の皆さんにお願いいたします。お互いのため、また子供たちの幸福のために努力するという約束を、最後まで守ってください。ここにおられる全ての方々にお願ひします。この世の圧迫、日々の障害に疲れ果てる

とつて聖体がどういう意味を持つのかを正確に、くまなく示す必要があったからでした。

「いざ歌え、わが舌よ、栄えある御体の奥義を。」聖トマス・アキナスの有名な賛歌の詩句は、神の民が聖体が必要としていることを雄弁に物語っています。「いざ歌え！」聖体の秘義を声高らかに歌いましょう！ 受難の秘義としてだけでなく、栄光の秘義として。聖体行列、特に「キリストの御体」の行列の伝統は、ここに端を発します。それは、教会が日々生きていく主の御体と御血の「秘義」に接した時、信者が感じる深い感動をめぐりに表わしています。今夜、ここラテラノ教会を出発し、永遠の都の街路を抜けてサンタ・マリア・マジョーレ教会に向かう行列も、同じ意義を担うものです。

ことがあっても、屈しないでください。誰もが無関心で自分の殻に閉じこもっていると思えるような時にも、神の子として、真のキリスト信者としての愛をもつて応じてください。(…)

子供の頃、よくこのような行列に加わったものです。その後、自分自身が司祭・司教として行列の先導をするようになりました。聖体の行列は、私の属していた共同体にとって、大きなイベントでした。ローマでもそうです。ローマは最後の晩餐の直接の証人の一人である使徒ペトロが証しを立てた地ですから、他のどの場所にも増してそうでしょう。いくつもの街路を

通り、聖なる聖体を運ぶ私たちは、紀元一千年代を特徴づける仕方で、信仰の遺産を継承しているのです。

聖パウロのコリントへの手紙は、この信仰に明るい光を投げかけます。聖体の制定に関する、恐らく最古の記述です。「主イエズスは裏切られた夜、パンを取り、感謝したのちそれを裂き、へこれはあなたたちの

不変の教え

ための私の体である。私の記念としてこう行え」と言われた。食事を終えてから同じように杯を取り、へこの杯は私の血における新しい契約である。これを飲むごとに、私の記念としてこう行え」と言われた。まことにあなたたちはこのパンを食べ、この杯を飲むごとに、主の来られるまで、主のご死去を告げるのである。」(エペソ2:11-23)

ミサのたびに「キリストは亡くなられた、キリストは復活された、キリストは再び来られる」と繰り返す教会は、あたたかも使徒が異教徒たちに向かって話した言葉をそのまま自らのものとして、全世界に向かって繰り返しているかのようです。

キリストの御体の典礼はキリストの司祭職を思い起こさせます。本日の答唱詩篇と第一朗読の創世の書にその言及があります。「あなたは永遠の司祭、メルキセデクの位に等しく。」(詩篇110:4) アブラハムの時代に生きたメルキセデクはサレム(のちのエルサレム)の王でした。彼はパンとぶどう酒を神に捧げました。アブラハムはこの類まれな司祭・王をたたえました。彼の姿に、自分の信仰の子らとなるべき神の民の未来の召し出しを予見した

かのようなのです。旧約のみならず、新しい永遠の契約にまで及ぶ召し出しです。

メルキセデクをモデルにしたキリストの司祭職が永遠であることが強調されます。「あなたは永遠の司祭!」超越の信仰の光に照らしてみれば、新しい永遠の契約の司祭が御父と等しい御子であることは明らかです。しばらくこの言葉を黙想してみましよう。「私の主に神のみことば。へ私の右に座れ、私は敵をあなたの足台としよう。」主はあなたの力ある杖をシオンから広められる。あなたの敵を治めよ。」(詩篇110:1-2)

そして最後に、「主権はあなたのもの、あなたの生まれた日から。」(110:3) 詩的なこのたとえは何を意味するのでしょうか? 新約で明かされた啓示に照らして読めば、そこには永遠の御父の御子、みことばの誕生について語られていることがわかります。この御子は神ご自身の約束により、いけにえとして自らを捧げることで「永遠の司祭」となったのです。司祭である御子は御体と御血を捧げます。それと同時にただ一回限りのいけにえを、メルキセデクがアブラハムの時代に捧げたのと同じく、パンとぶどう酒の形で教会に残されました。

こうしてキリストのいけにえは、聖体として食卓、小羊の食卓となりました。教会は日々私たちをこの食卓に招き、特に今日、この日に聖体にあずかるよううながします。教会の信仰は、この聖体が尽きることも欠けることもないと知っています。それらはルカの福音書にあるように、全ての人のためのものであります。「みなはそれを充分に食べ、余りを集めると十二かごもあつた。」(ルカ9:17)

キリストの御体の日、私たちは目を見張るばかりの豊かな聖体の賜物を讀みたいと思えます。神の民は常に、聖体の賜物を必要としていますから。

聖体を信奉し、祝い、受ける

そうですね! この地上のどこであろうと、典礼に加わり、聖体行列に従って歩くかぎり、私たちは「日の出る所から日の沈む所まで」世界各地で聖体を祝う全ての人と一つに結ばれていると感じます。ローマの聖体は、同時にイタリアの、地中海の島々の、ヨーロッパ大陸の数多い教会の聖体でもあります。全アメリカ大陸の、またアフリカ大陸の、福音のメッセージを受け取る無数の共同体の聖体でもあります。大西洋、インド洋、太平洋の

鳥々、アジアとオーストラリアの諸教会の聖体でもあります。私たちの聖体行列はここを出発し、ローマの街路をぬうように進みます。深く胸を打つ一つの言葉を繰り返しながら。ご聖体、ご聖体、ご聖体。私たちの心の目には、東から西まで、南から北まで、地球上のありとあらゆる教会がうつります。

●4・23 ローマで開かれた「生命の文化」国際会議にメッセージを送られた。「中絶を法で認め、生命を拒絶することは「死の文化」のしわざであり、安楽死の合法化に道を開くものです。」

●二日間の日程でイタリアのコモを司牧訪問される。5月5日、野外ミサでのお説教。「周囲の人々に主イエズスの生きた存在と贖いのわざを知らせるには、真に福音にのっとった生活を送る以外ありません。」「皆さん自身の家庭や地域社会こそ、福音を伝えるべき第一の場であることを忘れないでください。両親の皆さん、まず家庭の中で、神から委ねられ

私たちは共に聖体への信仰を告白し、聖体を祝い、受け取ります。そして使徒の言葉を繰り返すのです。「キリストは亡くなられ、キリストは復活された、キリストはまた来られる!」これこそ、決して消えることのない希望です。アーメン! (九五・六・十五、ローマで、聖体行列のミサの説教)

子供たちに皆さんの言葉と生活の模範で信仰を伝えてください。成人のキリスト信者にとっては、仕事の場が証しの場です。言葉だけでなく行いによっても、へ内にある希望の理由を知らせるべきです。」

教皇さまのうごき

(同日) アレルヤの祈りの時のお話。「聖母こそ全ての人のため取り成す方。神に餓え渴く人、疑いや不信の闇に沈む人、心身の試練に耐える人、罪に引きずられそうなる人、罪の支配から逃れようともがく人のために取り次いでくださる方。聖母は誰をも見過ごされません。」そして特に若者たちに向かい、たゆまず聖母に依り頼むよう勧められた。

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講義等を解説なしにそのままたたかえる月刊紙。毎月十日発行。定価 一部百八十円(送料別)。一年予約 送料とも、一〇五〇円から。詳しくは精進教育促進協会まで。

郵便振替 01130-8-72393